



TITLE:

モダリティ要素を含む連体修飾節 の分析：認知文法におけるグラウン ドの観点から

AUTHOR(S):

神澤, 克徳

CITATION:

神澤, 克徳. モダリティ要素を含む連体修飾節の分析：認知文法におけ
るグラウン드의観点から. 言語科学論集 2012, 18: 47-66

ISSUE DATE:

2012-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/173561>

RIGHT:

モダリティ要素を含む連体修飾節の分析

－認知文法におけるグラウンドの観点から－

かんざわ かつのり
神澤 克徳

京都大学大学院

rnkp43470@gmail.com

1. はじめに

日本語において、モダリティを表すとされる言語要素を末尾にとる節が、連体修飾節の修飾部になる可能性は、そのモダリティ要素によって様々である。勧誘や婉曲的命令、あるいは宣言を表す「(よ) う」、推量を表す「だろう」、根拠や理由のある推量や伝聞に基づく推量を表す「らしい」を例にとって見てみよう。(1a) は「(よ) う」を末尾にとる節を、連体修飾節の修飾部にいた例である。この例が容認不可能なことから分かるように、「(よ) う」を末尾にとる節が連体修飾節の修飾部になる可能性は極めて低い。一方、「らしい」を末尾にとる節は、(1c) から分かるように、連体修飾節の修飾部としてかなり自然である。「だろう」を末尾にとる節は、容認度の観点から見ると、その中間に位置付けられる。(1b) の文は、人によって容認度の判断が揺れたり、やや文語的な文章としては容認度が上がるというようにジャンルに偏りが見られたりする。

- (1) a. * {私／私たち} が修理しようドア
b. ? {私／私たち} が修理するだろうドア
c. {私／私たち} が修理するらしいドア

ここまでの観察では、連体修飾節の修飾部になる可能性という観点から見ると、「(よ) う」を末尾にとる節だけが他の 2 つのモダリティ要素を末尾にとる節とは大きく振る舞いが異なり、「だろう」を末尾にとる節と「らしい」を末尾にとる節はある程度振る舞いが似ていると思われるかもしれない。しかし、(2) のように、「の」による名詞化のテストをしてみると、「だろう」に関する (2a) は非文になる一方、「らしい」に関する (2b) は自然な文として解釈される。このことから、日本語学においては一律にモダリティ要素であるとされることの多い「(よ) う」、「だろう」、「らしい」は、連体修飾節の修飾部に置かれた場合、それぞれ異なる振る舞いをみせることが分かる。しかしながら、これまでの日本語学の説明においては、このような振る舞いの違いがどのような動機付けによって生じているのかを十分に明らかにすることはできない。

- (2) a. * {私／私たち} が修理するだろうのはあのドアです。
 b. {私／私たち} が修理するらしいのはあのドアです。

本論文は、認知文法 (Langacker 1987, 1991, 2008 など) の枠組みを用いて、これに関わる動機付けを統一的に明らかにすることが目的である。具体的には、グラウンド (ground) という概念を理論的基盤として用いる。グラウンドとは、主に発話行為 (speech act) に関わる要素を構造化したもので、(i) 参加者と (ii) 発話事態、そしてそれらに関連する (iii) 直接状況 (時間、場所) から構成される。

本論文の構成は以下の通りである。2 節で研究対象と研究目的をより詳しく示す。3 節では本論文で用いる理論的枠組み、すなわち認知文法におけるグラウンドの概念について概観する。4 節では、グラウンドの概念を用いて、2 節で述べた連体修飾節に関わる問題について具体的な分析を行う。5 節で今後の展望について述べ、本論文の結びとする。

2. 研究対象と研究目的

2.1 日本語のモダリティ要素

日本語学においては様々な言語表現がモダリティのカテゴリーに分類されている (cf. 仁田 1989、益岡 1991)¹。形態的観点から見てみると、「らしい」や「まい」のような分析可能性の低いものから、「よう・だ」、「べき・だ」、「かも・しれ・ない」のような分析可能性の比較的高いものまで様々な言語表現がモダリティ要素であるとされている。次に、統語・意味的観点から見てみると、日本語でモダリティ要素とされるものは必ずしも英語の法助動詞のような範列関係にはなく、複数のモダリティ要素が同一節内に共起できる場合が多く見られる。複数のモダリティ要素が同一節内に共起する場合、それらがおかれる統語位置にいかなる傾向も見られないわけではなく、モダリティ要素ごとにある程度の階層性が見られる。例えば「はず」、「だろう」、「ね」というモダリティ要素が同時におかれる場合、「*だろう・はずだ・ね」や「*はず (だ) ・ね・だろう」のような順序は許されず、必ず「はず・だろう・ね」という順序になる。渡辺 (1978, 1996) は、このような階層性がモダリティ要素の意味と非常に密接に関係していることを指摘している。すなわち、動詞により近い位置におかれる要素は叙述に関わる傾向にあり、動詞からより遠い位置におかれる要素は陳述に関わる傾向にある。渡辺は、叙述とは思想や事柄の内容を書き上げようとする話者の営みであり、陳述とは言語者めあてに発せられるという意味合いをもち、文を完結させる機能をもつものであると述べている。

また意味的観点から見てみると、英語の法助動詞に対応するようなもの (e.g. 推量の「だろう」、発話の力に関係するもの (e.g. 【命令】という発話の力に関係する「しろ」)、対人機能をもつもの (e.g. 「よ」、「ね」)、丁寧さを表すもの (e.g. 「です」、「ま

す」)、時制を表すもの (e.g. 「た」) など様々な言語表現がモダリティのカテゴリーに分類されている。また、意味的なスキーマ性の度合いも要素ごとに異なる。「まい」のようなある程度スキーマティックな要素から、「ほうがよい」のようにスキーマ性が低い要素までがモダリティのカテゴリーに分類されている (これは形態的観点として先に述べた、分析可能性と関係している)。

本論文ではモダリティ要素を末尾にとる節を扱うが、すべてのモダリティ要素について同列に分析を行うわけではない。先でも述べたように、日本語のモダリティ要素は複数のものが共起する可能性があり、それがおかれる順序は叙述と陳述のような意味的な事柄にある程度動機付けられているということが渡辺を中心とする先行研究で述べられている。今回はとりわけ、統語位置の階層において、ある程度近い位置にあると思われるモダリティ要素 (「(よ) う」、「しろ」、「ます」、「だろう」、「らしい」) を末尾にとる (3) のような節をケーススタディとして分析を行っていく。これらのモダリティ要素が共起する可能性は低く、ある程度の範列関係をなしている。

- (3) a. ドアを修理し {よう／ろ／ます}。
b. ドアを修理する {だろう／らしい}。

これらの要素を末尾にとる節は、連体修飾節の修飾部になる可能性という観点から見ると、それぞれ異なる振る舞いを見せる。本論文は渡辺の議論がかなり参考になっているが、叙述と陳述という意味的スケールの反映としての統語位置のみでは十分に説明できない (問題となるモダリティ要素の節内での統語位置はほぼ同じであるため)。それゆえ、別の方法によってその振る舞いの違いが生じる動機付けを説明する必要がある。

2.1 節では日本語のモダリティに関して概観してきたが、2.2 節では本論文で問題とする現象を確認する。具体的には、先に述べたモダリティ要素を末尾にとる節が連体修飾節の修飾部におかれた場合、どのような振る舞いを見せるのかについてモダリティ要素ごとに見ていく。

2.2 現象の観察

2.2 節では本論文で研究対象とする言語現象について見ていく。言語表現の容認度に関する判断は基本的には執筆者の内省に基づいている (個人によって容認度の判断がかなり揺れることが予想されることをあらかじめ指摘しておく)。ある言語表現が非文であると判断されるのには少なくとも (i) 文法性の問題 (文脈を設定しても不可)、(ii) 語用論の問題 (文脈を設定すれば可)、(iii) ジャンルやスタイルの問題、が関係している。基本的に本論文では (i) の問題に関係する非文にはアスタリスク (*) を付与し、(ii) と (iii) の問題に関係する非文には井桁記号 (#) を付与する。

まず (4) の例を見てみよう。これらの節内の要素を被修飾部において連体修飾節にした (5) はいずれも自然な表現として理解される。

- (4) a. 地中から不発弾を見つけた。
- b. 秋祭りで獅子舞が民家を訪れた。
- (5) a. 地中から見つけた不発弾
- b. 秋祭りで獅子舞が訪れた民家

では、(6) のような文末に「(よ) う」というモダリティ要素をとる節についてはどうだろうか。(6) はともに勧誘や婉曲的命令として解釈される。この場合 (5) とは異なり、これらの節内の要素を被修飾部において連体修飾節にした (7) はいずれも非文となる。

- (6) a. なんとか出稼ぎの足を確保しよう。
- b. 相手の気持ちを読むより、その場の空気を読もう。
- (7) a. * なんとか確保しよう出稼ぎの足
- b. * 相手の気持ちを読むより、読もうその場の空気

動詞の命令形や丁寧を表す「ます」を末尾にとる他動詞節についても同様の傾向が見られる。まずは動詞の命令形について例をあげる。末尾に命令形の動詞をとる (8) は、その節内の要素を被修飾部において連体修飾節にすることができない。

- (8) a. 道警の裏金を先に捜査しろ。
- b. 入浴の前後やゴルフの前後にしっかり水を飲め。
- (9) a. * 先に捜査しろ道警の裏金
- b. * 入浴の前後やゴルフの前後にしっかり飲め水

また、「ます」を末尾にとる他動詞節においても、(11) から確認できるように、基本的にはその節内の要素を被修飾部において連体修飾節にすることができない。

- (10) a. カットとパーマを繰り返しています。
- b. 一年前ほど前から心理学を勉強しています。
- (11) a. * 繰り返していますカットとパーマ
- b. * 一年前ほど前から勉強しています心理学

ここまでは、「(よ) う」、「ます」、動詞の命令形を末尾にとる節が連体修飾節の修飾

部におかれる可能性は基本的にはないことを確認した。次に、同様の観点から、推量を表す「だろう」が文末におかれる節について見てみよう。(12)の節内の要素を被修飾部において連体修飾節にしたのが(13)である。容認度判定として井桁記号を付与しているが、これはこの節の容認度がジャンルやスタイルに依存する傾向にあることを意味する。すなわち、小説や論文などのやや堅い文章だと容認度が高くなるのに対して、口語などでは容認度が低くなる。頻度という観点から見ても、口語よりも小説や論文などのやや堅い文章において多く見られる。

(12) a. たぶん歌の世界には熾烈な競争があるだろう。

b. 説得には時間がかかるだろう。

c. みんなが現状に満足しているだろう。

(13) a. # たぶん熾烈な競争があるだろう歌の世界

b. # 時間がかかるだろう説得

c. # みんなが満足しているだろう現状

形式名詞「こと」や名詞化辞「の」を被修飾部においてみるとどうだろうか。「こと」を被修飾部においた(14)は、非文法的というわけではないが、その容認性の判断においてジャンルやスタイルなどが密接に関わる。すなわち、(13)と同様、小説や論文などのやや堅い文章だと容認度が高くなるのに対して、口語などでは容認度が低くなる。そして、「の」を被修飾部においた連体修飾節は(15)からも分かるように、非文法的な表現として解釈される。

(14) a. # たぶん歌の世界には熾烈な競争があるだろうことは分かっている。

b. # 説得には時間がかかるだろうことは分かっている。

c. # みんなが現状に満足しているだろうことは分かっている。

(15) a. * たぶん歌の世界には熾烈な競争があるだろうのは分かっている。

b. * 説得には時間がかかるだろうのは分かっている。

c. * みんなが現状に満足しているだろうのは分かっている。

最後に、「らしい」を末尾にとる節が連体修飾節の修飾部におかれる場合について見ていく。(16)の節内の要素を被修飾部において連体修飾節にしたのが(17)である。これらはいずれも自然な表現として解釈される。

(16) a. そのCDプレイヤーは石動が持ち込んだらしい。

b. 先週の回で、ホランドとレントンのお姉さんとの間に、何かあったらしい。

c. みんなが現状に満足しているらしい。

- (17) a. 石動が持ち込んだらしい CD プレイヤー
 b. ホランドとレントンのお姉さんとの間に、何かあったらしい先週の回
 c. みんなが満足しているらしい現状

また「らしい」を末尾にとる節が、形式名詞「こと」や名詞化辞「の」を被修飾部とする連体修飾節の修飾部におかれた場合について見てみよう。「こと」を被修飾部とする (18) は自然な表現として解釈できる。また興味深いことに、「の」を被修飾部とする連体修飾節の修飾部におかれた場合、「だろう」を末尾にとる節と「らしい」を末尾にとる節の間に、容認度に差が見られる。すなわち、「だろう」を末尾にとる節が「の」を被修飾部とする連体修飾節の修飾部におかれた場合、その表現全体は極めて容認性が低いのに対して、「らしい」を末尾にとる節が「の」を被修飾部とする連体修飾節の修飾部におかれた場合、その表現全体の容認性は高くなる。

- (18) a. その CD プレイヤーを石動が持ち込んだらしいことは分かっている。
 b. 先週の回で、ホランドとレントンのお姉さんとの間に、何かあったらしいことは分かっている。
 c. みんなが現状に満足しているらしいことは分かっている。
 (19) a. その CD プレイヤーを石動が持ち込んだらしいのは分かっている。
 b. 先週の回で、ホランドとレントンのお姉さんとの間に、何かあったらしいのは分かっている。
 c. みんなが現状に満足しているらしいのは分かっている。

2.3 本論文の目的

2.1 節で見たように、日本語学においては様々な言語表現がモダリティのカテゴリーに分類されている。また日本語では、述語内において複数のモダリティ要素が共起する可能性があり、それがおかれる順序は意味的な事柄によってある程度動機付けられていると考えられている (cf. 渡辺 1978, 1996)。すなわち、統語位置の階層においてある程度近い位置にあると思われるモダリティ要素は、叙述と陳述という意味的スケールにおいてもある程度近い位置にあるということがしばしば議論されている。例えば、「(よ) う」、「しろ」、「ます」、「だろう」、「らしい」というモダリティ要素は互いに共起することが少なく範列関係をなしていると考えられることから、統語位置の階層においても、叙述と陳述という意味的スケールにおいてもある程度近い位置にあると思われる。しかしながら 2.2 節で見たように、これらの要素を末尾にとる節は、連体修飾節の修飾部になる可能性という観点から見ると、それぞれ異なる振る舞いを見せる。このように、(i) 従来の日本語学においてモダリティのカテゴリーに分類されてきて、(ii) 叙述と陳述という意味的スケールの反映としての統語位置の階層におい

でもある程度近い位置にある言語要素があるが、それらを末尾にとる節が連体修飾の修飾部におかれたとき、それぞれの容認度に違いが見られる。この容認度の違いがいかなる動機付けによって生じているかを明らかにすることが本論文の目的である。

3. 認知文法におけるグラウンド

2.3 節で見たように、本論文の目的は、「(よ) う」、「しろ」、「ます」、「だろう」、「らしい」というモダリティ要素を末尾にとる節が連体修飾の修飾部におかれたとき、それらがみせる振る舞いの違いがどのような動機付けによって生じているかを明らかにすることである。本節では、それを明らかにするための理論的枠組みについて、簡単ではあるが検討していく。具体的に、本研究では認知文法におけるグラウンドという概念から上で述べた動機付けを説明していく。

認知文法において、グラウンドはパースペクティブ (perspective) に関わる問題として捉えられる。パースペクティブは視点の配置 (viewing arrangement)、すなわち観察者と観察されている状況の全体的な関係のことである。観察者はあるできごとを概念化する認知主体であり、話し手や聞き手でもある。発話行為において、参与者と発話事態、それに関連する直接状況 (時間、場所) はグラウンドとよばれる。

(20) The term ground is used for the speaker and hearer, the speech event in which they participate, and their immediate circumstances (e.g. the time and place of speaking).

(Langaker 2008: 78)

グラウンドは、より客観的な対象の位置の特定を助ける非明示的な参照点として機能する傾向がある。またグラウンドは、基本的にあらゆる言語表現の意味に関わる。図 1 は、言語表現が表す意味の基本的スキーマである。最大スコープ (MS) は意識化が可能なスコープ全域、直接スコープ (IS) はオンステージ領域、プロファイル (太線のボックス) は注意の焦点を表す。破線の矢印は注意の方向を表す。その経路 (channel) には、(i) 対話者同士の注意と (ii) 対話者たちの、オンステージにプロファイルされたモノ (thing) や関係 (relation) への注意の 2 種類がある (cf. Langacker 2008: 78, 260)。

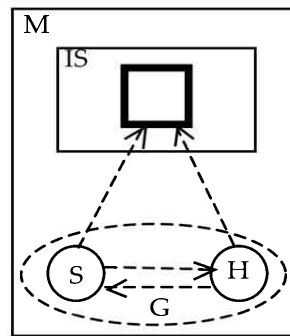


図 1：一般的な発話行為 (Langacker 2008: 261)

Langacker は英語法助動詞に関して、図 2 の認知図式を提示している。英語の法助動詞はグラウンディング要素である。グラウンディング要素は、主に以下の特徴をもつ (Langacker 2008: 263)。

(21) グラウンディング要素の主な特徴

- (i) オンステージにあるモノ、あるいはプロセスをプロファイルする。
- (ii) 意味がスキーマ的であり、たいていは認識的特性の基本対に限定される (e.g. real vs. potential, proximal vs. distal) 。
- (iii) 語彙と文法の連続性 (lexical/grammar continuum) において、文法の側に属する。

グラウンディング要素によってプロファイルされるプロセスはオンステージにある。一方グラウンド自体はオフステージにあり、主体的に解釈される。法助動詞が表す効力 (e.g. should が表す「義務」) は節のトラジェクター (trajector) ではなく、グラウンドに存在する。

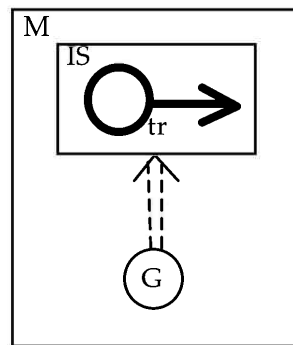


図 2：法助動詞に関わる発話 (Langacker 2008: 304)

本節では、本論文の理論的枠組みとなる認知文法におけるグラウンドという概念に関して簡潔に検討を行った。次節では具体的に「(よ) う」、「しろ」、「ます」、「だろう」、「らしい」というモダリティ要素を末尾にとる節が連体修飾の修飾部におかれたとき、それらがみせる振る舞いの違いがどのような動機付けによって生じているかを明らかにしていく。

4. グラウンドと連体修飾節

4.1 グラウンドを構成する要素

4 節では、「(よ) う」、「しろ」、「ます」、「だろう」、「らしい」というモダリティ要素を末尾にとる節が連体修飾の修飾部におかれたとき、それらがみせる振る舞いの違いがどのような動機付けによって生じているかを認知文法のグラウンドの観点から明らかにしていく。3 節で見たように、グラウンドは主に以下の 3 つの要素からなる (Langacker 2008)。

- (22) (i) 話し手と聞き手
- (ii) 発話事態
- (iii) 直接状況 (時間、場所)

(22) の (i) の話し手は、Langacker (1991) の言う効力の出所 (locus of potency) に関わる。効力の出所が話し手に特定される場合、その発話はよりグラウンドに関わっているといえる。効力の出所という概念を理解するために、少し例を見てみよう。Langacker は英語の法助動詞を例に効力の出所の分析を行っている。それによると、英語では内容動詞と法助動詞では、その効力の出所の特定性に違いが見られる。

- (23) a. He wants to leave the table now.

- b. The noise must cease immediately. (Langacker 1991: 272, 一部改変)
 c. It must be lonely there at night. (ibid.: 272)

(23a) の *want* は本動詞である。*want* が表す効力を「意志」だとすると、その効力は主語である *He* から生じている。

法助動詞では、根源的用法と認識的用法によって、さらに違いが見られる。(23b) の法助動詞 *must* は、一般的に根源的用法とされる。この *must* が表す効力を「義務」だとすると、この効力の出所の解釈は文脈によって揺れが生じる。1 つ目の解釈は話し手がその出所となっているというものである。2 つ目の解釈は、他の誰か（この例の場合は家主など）によって生じた効力を話し手が報告している場合である。3 つ目は社会常識によって生じた効力を話し手が報告している場合である (e.g. *The noise must cease immediately, or there will be an avalanche!*)。Langacker では言及されていないが、これらは複合的に重なると思うほうが自然である。このように、これらの要素は単純に切り分けられるわけではない。話し手が効力の出所となっている場合でも、話し手以外の人の発話や周囲の状況や社会常識を判断材料として、総合的な判断をくだしている可能性は十分に考えられる。逆に、他の誰かや、社会常識によって効力が生じる場合が存在するかということに関しても疑問が残る。最終的にそれを報告するのは、会話の責任者としての話し手であるので、やはりいかなる場合においても 1 つ目で見たとような話者の判断が少なからず関わっていると思うほうが、自然ではないかと思われる。

(23c) の法助動詞 *must* は、一般的に認識的用法とされる。*must* が表す効力を「可能性」だとすると、この効力の出所は特定が困難である。「可能性」には特定の源があるわけではなく、単にあるプロセスが世界の漸進運動 (evolutionary momentum) の中でどのように進展していくかに関わる³。

ここまで見てきた効力の出所の特定性は、効力の質的な問題に関わると思われる。「意志」は基本的には誰かに課せられるものではなく、主体に自発的に生じるものである。また「義務」は誰かに課したり、誰かから課されたりできる。一方、「可能性」は基本的には人間によってコントロールすることができない（基本的には主体の働きかけなどでは変動しない）。これをまとめたのが表 1 である。

表 1：効力の出所の特定性

linguistic elements	main verbs	root modals	epistemic modals
locus of potency	◎	○	△

次に、(22) の (i) の聞き手は、聞き手の特定性という観点から考える。聞き手の特定性が高い発話ほど、よりグラウンドに関わっているといえる。本論文では、聞き手

の特定性を、ある発話がその聞き手にどれだけ依存しているかによって判断する⁴。通常の発話場面において、話し手は聞き手を想定して、それに見合った言語表現を選択している。したがってあらゆる言語表現は多かれ少なかれ聞き手が想定されているが、発話によっては聞き手の存在が不可欠なものがある。(24) は意味論的には正しい文であるが、聞き手が不在の場合、【疑問】という発話の力は無効になる。

(24) ココスのハンバーグはおいしいですか。

また、同じ発話の場合でも、聞き手の特定性には違いが見られる。(25) の場合、(25b) のほうが聞き手の特定性は高い。

- (25) a. (ネットの掲示板において) ココスのハンバーグはおいしいですか。
b. (目前にいる知人に対して) ココスのハンバーグはおいしいですか。

(22) の (ii) の発話事態に関しては、本論文では発話の力 (illocutionary force) という観点から考えてみたい。(26) はそれぞれ【命令】、【約束】、【忠告】、【宣言】という発話の力をともなう (山梨 1986)。

- (26) a. I order you to play the game with me. 【命令】
b. I promise that I'll be there tomorrow. 【約束】
c. I advise you to help her. 【忠告】
d. I now pronounce you man and wife. 【宣言】

発話の力は発話時点でもたらされるため、発話事態と切り離すことができない⁵。したがって発話の力をともなう言語表現は、グラウンドと密接に関わる。

(22) の (iii) の直接状況 (時間、場所) に関しては、本研究では時制の移動可能性という観点から考える。通常の動詞の場合、過去時を表す「た」をとることができる。これは、そのプロセスが発話時から切り離せることを意味する。しかしながら、「た」をとることができない言語要素が存在する。(27a) の「です」、(27b) の「か」がそれである。したがって、「です」が表す「丁寧」や、「か」が表す「疑問」は発話時から切り離せない直接状況である。直接状況を表す発話ほど、グラウンドにより関わっている。

- (27) a. * ココスのハンバーグはおいしいでしたか。
b. * ココスのハンバーグはおいしいでしたか。

ここまでは、Langacker の言うグラウンドが、(i) 話し手と聞き手、(ii) 発話事態、(iii) 直接状況（時間、場所）によって構成されていることを述べ、それぞれについてどのような観点から取り扱うことができるかについて述べた⁶。これをまとめたものが (28) である。

- (28) (i) 話し手と聞き手：効力の出所の特定性、聞き手の特定性
 (ii) 発話事態：発話の力
 (iii) 直接状況（時間、場所）：時制の移動可能性

これらの観点は完全に独立したものではなく重なる部分がある。例えば、発話の力を表す言語表現においては *I <verb> you* が階層の最上位に位置付けられているため聞き手の特定性に関わるであろうし、同時にそれは発話時、発話場所に限られたものであるので、時制の移動可能性にも関わるであろうと考えられる。これらの観点の関係性の詳細な整理は今後の課題とする。

4.2. 事例分析

4.1 節では Langacker の言うグラウンドが、(i) 話し手と聞き手、(ii) 発話事態、(iii) 直接状況（時間、場所）から構成されることを述べ、それぞれが (i) 効力の出所の特定性と聞き手の特定性、(ii) 発話の力、(iii) 時制の移動可能性から捉えられることを示した。本節では、「(よ) う」、「しろ」、「ます」、「だろう」、「らしい」というモダリティ要素を末尾にとる節が連体修飾の修飾部におかれた (29) の事例について、これらの観点から具体的な分析を行っていく。(29) はモダリティ要素を変項とし、それ以外はできる限り言語形式を揃えた作例である⁷。作例のねらいは、以下での議論が主にモダリティ要素に関わるものであることを示すことにある。

- (29) a. おまえがドアを修理しろ。
 b. 私がドアを修理しよう。
 c. 私がドアを修理します。
 d. 私がドアを修理するだろう。
 e. 私がドアを修理するらしい。

4.2.1. 効力の出所の特定性

まずは効力の出所の特定性について考えてみよう。(29a) の「しろ」が表す「命令」という効力は、話し手から生じている。その効力は話し手以外の人、あるいは社会常識のなどからもたらされた可能性は低い。同じように、(29b) の「よう」が表す【宣言】や「ます」が表す「丁寧」も話し手からもたらされている。一方、(29d, e) の「だ

ろう」、「らしい」では効力の出所はややあいまいになる。(29d) では話し手という解釈もできるが、話し手がその推量に至った何らかの根拠が外部世界にあればその根拠も効力の出所として解釈できるだろうし、単に指示されたプロセスが世界の漸進運動において実現にむかっていることを表すにすぎないという解釈も可能である。また、これらが複合的に働いていると考えることも自然である。ただしいずれの場合も、話し手が「推量」の主体であることに注意したい。(29e) では話し手解釈のほかに、外部世界にある何らかの根拠も効力の出所として解釈できるだろうし、話し手以外の誰かによる判断を話し手が報告しているという解釈もできる。これらが複合的に働いている可能性もある。また単に指示されたプロセスが世界の漸進運動において実現にむかっていることを表すにすぎないという解釈も可能である。この場合も、話し手が「推量」の主体である。

(29) a. おまえがドアを修理しろ。

b. 私がドアを修理しよう。

c. 私がドアを修理します。

d. 私がドアを修理するだろう。

e. 私がドアを修理するらしい。

(再掲)

これをまとめると次のようになる。左側に位置付けられるほど、グラウンドにおける話し手との関係性がより高い言語表現と言える。

(30) 話し手との関係性

(29a), (29b), (29c) > (29d), (29e)

4.2.2 聞き手の特定性

次に、聞き手の特定性について考えてみる。4.1 節で見たように、聞き手の特定性とはその発話が適切と解釈されるために明確な聞き手を必要とするかどうかの判断に関わる。(29a, c) の発話は特定の聞き手の存在を前提とする。(29a) が表す「命令」を含む発話は、特定の聞き手が想定されない限りそれらの効力が生じない。したがって、不特定多数の聞き手を想定した発話としては不適切となる。これは「しろ」を末尾にとる節が「#私／#私たち」あるいは「#彼／#彼女／#彼ら／#彼女ら」を主語にとることができないという点に関係している。

(29) a. おまえがドアを修理しろ。

(再掲)

(29b, c) は特定の聞き手の存在を前提とした発話という性質が優勢ではあるが、そ

れに特化した言語表現ではない。(29b) はモノローグ的な発話も考えられる。また (29c) は不特定多数にむけた発話も可能である。したがって、(29a) に比べると聞き手の特定性はやや落ちるかもしれない。

- (29) b. 私がドアを修理しよう。 (再掲)
 b'. (モノローグ) よし、私がドアを修理しよう。
 c. 私がドアを修理します。 (再掲)
 c'. (壊れたドアに貼り紙で) 私がドアを修理します。

一方で (29d, e) は聞き手が特定されている場合においても、不特定の聞き手を想定している場合においても適切な発話として解釈される⁸。

- (29) d. 私がドアを修理するだろう。
 e. 私がドアを修理するらしい。 (再掲)

これをまとめると次のようになる。左側に位置付けられるほど、グラウンドにおける聞き手との関係性がより高い言語表現と言える。

(31) 聞き手との関係性

(29a) > (29b), (29c) > (29d), (29e)

4.2.3 発話の力

本節では、(29) の事例が発話の力をもつかどうか検討する。なぜなら、発話の力の伝達は発話事態とともに達成されるため、発話の力をともなう節ほど発話事態との関連性が強いと考えられるためである。したがって発話の力をともなう言語表現は、グラウンドと密接に関わる。

(29) のうち、一般的に発話の力を強くともなうとされるのは (29a, b) である。これらの言語表現が特定の聞き手を前にして発話されたとき、(29a) では聞き手に何かを強いるような発話の力 (e.g. I order you) がもたらされ、(29b) では聞き手に何かを宣言するような発話の力 (e.g. I pronounce you) がもたらされる。(29c, d, e) では、もたらされる発話の力はこれに比べて弱いと考えられる。

- (29) a. おまえがドアを修理しろ。【命令】
 b. 私がドアを修理しよう。【宣言】 (再掲)

これをまとめると次のようになる。左側に位置付けられるほど、グラウンドにおける

発話事態との関係性がより高い言語表現と言える。

(32) 発話事態との関係性

(24a), (24b) > (24c), (24d), (24e)

4.2.4 時制の移動可能性

最後に、時制の移動可能性を考えるにあたって、ある節が過去形をとることができるかどうかのテストが有効になる。過去形をとることができない節は、グラウンドと密接に関わっている。一方、過去形をとることができる節は、それに比べてグラウンドとの関わりが弱いといえる。(33a, b, d) で示されるように、(29a, b, d) は過去形をとることができない。したがって「しろ」や「よう」が表す【命令】や【宣言】という発話の力や、「だろう」が表す「推量」の意味は発話時と密接に関わっているといえる。

(33) a. * おまえがドアを修理しろた。

b. * 私がドアを修理しようかった。

d. * 私がドアを修理するだろうかった。

一方、(34) で示されるように、(29e) の「らしい」は過去形をとり、過去の時点での推量を叙述することができる。この点で、発話時との関わりは相対的に弱いといえる。

(34) 私がドアを修理するらしかった。

(29c) の「ます」は形態的には過去形をとるが、それが過去の時点での「丁寧」を表しているとはいいにくい。ここで表されているのは「ドアを修理した」という過去のイベントを報告する上での、現在時の「丁寧」である。

(35) 私がドアを修理しました。

これをまとめると次のようになる。左側に位置付けられるほど、グラウンドにおける直接状況（特に時間）との関係性がより高い言語表現と言える。

(36) 直接状況との関係性

(29a), (29b), (29c), (29d) > (29e)

4.3 本節のまとめ

本節における、ある節のグラウンドとの関係性の分析は、表 2 によって示される。記号はグラウンドとの関係性の相対的な高さを表しており、三角、丸、二重丸の順でグラウンドとの関係性が高いことが示される。この表から分かるように、ある節のグラウンドとの関係性と、連体修飾節の修飾部としての容認度には相関性が見られる。「しろ」節、「(よ) う」節、「ます」節のように、グラウンドとの関係性が高いものは連体修飾節の修飾部としての容認度が低くなる。一方「らしい」節は、グラウンドとの関係性が相対的に低いため、連体修飾節の修飾部として生起しやすくなる。また、2 節で見たように、「だろう」節が「らしい」節に比べて連体修飾節の修飾部としての容認度が低くなるのは、「だろう」節が「らしい」節よりも直接状況（時間）に関わっているためであると分析できる。もちろん、ある節とグラウンドとの関係性は一般的な場合であって、文脈によってその関係性は変動する。文脈ごとの詳細な関係性の分析は今後の課題としたい。

表 2：節ごとのグラウンドとの関係性と連体修飾節としての適切性

	「しろ」節	「(よ) う」節	「ます」節	「だろう」節	「らしい」節
話し手との関係性	◎	◎	◎	△	△
聞き手との関係性	◎	○	○	△	△
発話事態との関連性	◎	◎	△	△	△
直接状況との関係性	◎	◎	◎	◎	△

5. まとめと今後の展望

5.1 まとめ

日本語において、モダリティを表すとされる言語要素を末尾にとる節が、連体修飾節の修飾部におかれた場合、その容認度には違いが見られる。具体的には、「らしい」を末尾にとる節は連体修飾節の修飾部におかれても自然である。一方、「しろ」、「(よ) う」、「ます」を末尾にとる節が連体修飾節の修飾部におかれると、その言語表現は容認されにくくなる。「だろう」を末尾にとる節はその中間に位置付けられ、それが連体修飾節の修飾部におかれた場合、人によって判断が揺れたり、その容認度がジャンルに依存したりする。

本論文では、このような容認度の差が生じる動機付けを認知文法のグラウンドの観点から明らかにした。ある節がグラウンドとどれだけ関係しているかということと、連体修飾節の修飾部としてその節がどれだけ容認可能かということには相関性が見られ、グラウンドとより強く関わる節は、連体修飾の修飾部として容認されない傾向にあることを明らかにした。すなわち、「しろ」、「(よ) う」、「ます」を末尾にとる節はより強くグラウンドと関わっている。一方「らしい」を末尾にとる節はグラウンドと

関わりが相対的に弱い。「だろう」を末尾にとる節はその中間に位置付けられる。

本論文は、以下の2点で意義のあるものとする。1つ目は Langacker の認知文法におけるグラウンドの概念への理論的貢献である。本研究ではグラウンドの内実の一部を明らかにした。また日本語の個別事例について、グラウンドの概念が適応できることを示した。2つ目は、一般言語学への貢献である。これまで発話の力のような発話行為論とモダリティのような意味論は別々に分析されてきた。本論文は、これらを包括的に捉え、その関係性を分析する研究につながる可能性がある。

5.2 今後の展望

5.1 節でも述べたように、グラウンドとより強く関わる節は、連体修飾節の修飾部として容認されない傾向にある。今後はいかなる理由でそのような傾向が生じるのかという疑問を明らかにしていく必要がある。これについて、具体的に検討していくことは今後の課題としたいが、本論文ではそれを考えるにあたって3つの観点を提示する。1つ目が連体修飾節の機能という観点、2つ目が認知文法における参照点構造の観点、3つ目が主題性の観点である。それぞれについて簡潔に見ていく。1つ目の連体修飾節の機能であるが、Givón (1990) は関係節、すなわち連体修飾節の修飾部の主な機能として、指示的同定 (referential identification) をあげている。グラウンドに関する情報は、指示物を同定したり、それに関する背景的情報を付加したりするために有益なものとみなされない場合が多いため、それを連体修飾節の修飾部におくことは連体修飾節の機能にそぐわないものとなる。2つ目が認知文法における参照点構造の観点であるが、連体修飾節は修飾部を参照点、主要部をターゲットとする参照点構造を有すると考えることができる。参照点としては、話し手や聞き手からアクセスしやすく、ターゲットをよりスムーズに導くものが好まれると考えられるが、グラウンドに関する情報は後者にそぐわないため、連体修飾節の修飾部として容認されない傾向にあると思われる。3つ目の観点は主題性である。Kuno (1973) は、日本語の連体修飾節の特徴のひとつとして、主題化 (thematization) できるものは修飾化 (relativization) できるという性質をあげている。例えば、(37a) は (37b) のように主題化できるため、(37c) のように修飾化もできる。一方、(38a) は (38b) のように主題化できないため、(38c) のように修飾化もできない。

- (37) a. 大勢の人がその村に来了。
 b. その村は大勢の人が来了。
 c. 大勢の人が来た村

(Kuno 1973: 243, 一部改編)

- (38) a. ジョンがその村から来了。
 b. * その村はジョンが来了。

'As for the village, John came.'

c. * ジョンが来た村

'the village that John came from'

(*ibid.*: 243, 一部改編)

ここでグラウンドとの関係を考慮すると、グラウンドと密接に関わる節は話し手と聞き手を焦点化する。その節が連体修飾節の修飾部におかれた場合、焦点化された話し手と聞き手と、主題的性質の高い主要部との間で競合が起きるため、そのような節は連体修飾の修飾部として容認されない傾向にあると考えられる。

注

1. 「ムード」は動詞類の屈折体系に関わる文法範疇を表す用語であるとされる(e.g. スペイン語の直接法、接続法、命令法)。一方、「モダリティ」は動詞類の屈折体系にとらわれない、より一般性の高い概念として位置付けられるとされる(cf. 益岡 1991)。

モダリティのタイプ分けに関しては仁田 (1989)、益岡 (1991) などの研究があるが、分類の基準が明確ではないためアドホックであること(ラベルをいくつ用意すればいいのかが示されていない)、それぞれの分類ごとの関連性が不明瞭であること、研究者間で用語の統一性がはかられていないことなどの問題点が指摘できる。本論文ではモダリティのタイプ分けに関しては考察の対象には含めない。

2. この種の表現は特定の文脈においてはかなり自然に用いられる。例えば、バスガイドが発する以下の表現はかなり自然な表現として解釈される(e.g. こちらに見えますお寺は東寺でございます。)
3. Langacker は「可能性」を確実性に基づいて予測的実在 (projected reality) と潜在的実在 (potential reality) に分類する。前者は、認知主体がより確実に未来に生じると想定したプロセスで、後者は認知主体が単に未来に生じる可能性があるとして想定したプロセスである。詳しくは、Langacker (2008: 306) を参照。

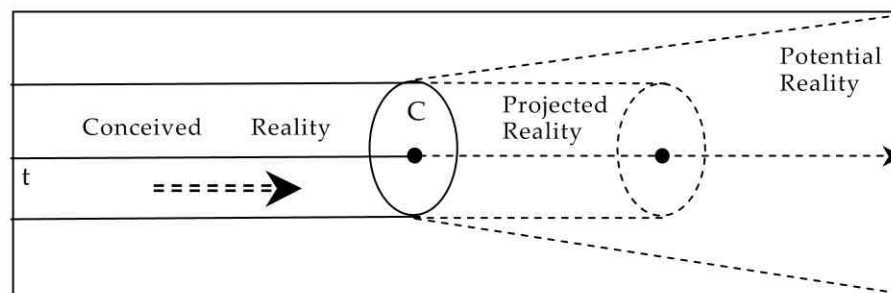


図 i : 動的漸進モデル (Langacker 2008: 306)

4. 聞き手の特定性をより明示的に理解するための手立てとして、会話分析の知見が役

立つと思われる。考えられる方法としては、(i) 「呼びかけ」の言語表現に注目する、(ii) 会話の参加者の視線の動き（アイコンタクト）に注目する、(iii) 発話者の声の大きさに注目する、などが挙げられる。

5. 発話の力の成立条件については、山梨 (1986: 17) を参照。
6. これらの方法はあくまで可能性のひとつである。グラウンドを直接理解することはできないが、何らかの言語形式に還元する方法を考えるなどしてできる限り明示的にすることが今後の課題である。
7. 動詞の命令形「しろ」の主語が一人称であることは不自然である。本研究では、スタイルも考慮して、二人称の「おまえ」を付与した。
8. 森山 (1989) は、平叙文の「だろう」には (i) の (a) のような「聞き手情報配慮」の意味と、(i) の (b) のような「聞き手情報非配慮」の意味があるとしている。「聞き手情報配慮」の「だろう」が含まれる節は、「聞き手情報非配慮」の「だろう」が含まれる節にくらべて、連体修飾節の修飾部としては不適格となる。

- (i) a. ほら、彼は来ただろう。Look! He came, didn't he?
 b. 彼はたぶん来ただろう。Perhaps, he came. (森山 1989: 100)
- (ii) a. * 彼も来ただろう AKB の握手会は1時間で終了した。 (聞き手情報配慮)
 b. ? 彼も来ただろう AKB の握手会は1時間で終了した。 (聞き手情報非配慮)

9. 日本語のモダリティに関わる言語要素には、Langacker が分析している英語の法助動詞よりも様々なタイプが見られる。スキーマ性に関しても、言語要素ごとに抽象的なものから、より具体的な要素が見られる。このため、日本語のモダリティに関わる言語要素がグラウンディング要素 (grounding element) といえるかについては検討の余地がある。

参考文献

- Austin, John. L. 1962. *How to Do Things with Words*. Harvard University Press.
- Givón, Talmy. 1990. *Syntax: A Functional Typological Introduction*. Vol. II. Amsterdam; Philadelphia: J. Benjamins.
- Kuno, Susumu. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass. and London: MIT Press.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar: Volume II: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4 (1): 1-38.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford

- University Press. (山梨正明 (監訳)『認知文法論序説』東京: 研究社, 2011)
- Lyons, John. 1977. *Semantics. vol.2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, Frank. R. 1986. *Mood and Modality*. Cambridge University Press.
- Ross, John. R. 1970. On Declarative Sentences. In Jacobs and Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, 222-272. Waltham, Mass.: Ginn & Co.
- Shibatani, Masayoshi. 2012. Functional Definitions of Clauses and Sentences. In Nagoya University.
- Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 神尾昭雄. 1990.『情報のなわ張り理論：言語の機能的分析』東京. 大修館書店.
- 益岡隆志. 1991.『モダリティの文法』東京: くろしお出版.
- 南不二男. 1974.『現代日本語の構造』東京: 大修館書店.
- 森山卓郎. 1989.「認識のムードとその周辺」仁田義雄、益岡隆史 (編)『日本語のモダリティ』東京. くろしお出版.
- 日本記述文法研究会. 2003.『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』東京: くろしお出版.
- 仁田義雄. 1989.「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄、益岡隆志 (編)『日本語のモダリティ』東京: くろしお出版.
- 澤田治美. 2006.『モダリティ』東京: 開拓社.
- 時枝誠記. 1941.『国語学原論』東京: 岩波書店.
- 渡辺実. 1978.「叙述と陳述-述語文節の構造-」服部四郎、川本茂男、柴田武編『日本の言語学 第 3 巻 文法 I』261-283. 東京: 大修館書店.
- 渡辺実. 1996.『日本語概説』東京: 岩波書店.
- 山梨正明. 1986.『発話行為』東京: 大修館書店.
- 山梨正明. 1995.『認知文法論』東京: ひつじ書房.
- 山梨正明. 2000.『認知言語学原理』東京: くろしお出版.

言語資料

KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス」少納言
(<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>)